

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2002年 9月18日  
Date of Application:

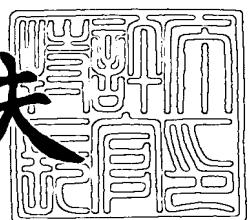
出願番号 特願2002-271576  
Application Number:  
[ST. 10/C] : [JP 2002-271576]

出願人 東芝セラミックス株式会社  
Applicant(s):

2003年 8月 6日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願  
【整理番号】 TSA2040P  
【提出日】 平成14年 9月18日  
【あて先】 特許庁長官 太田 信一郎 殿  
【国際特許分類】 B01J 35/02  
B01J 21/06

## 【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県秦野市曾屋30番地 東芝セラミックス株式会社 開発研究所内

【氏名】 周 忠華

## 【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県秦野市曾屋30番地 東芝セラミックス株式会社 開発研究所内

【氏名】 徳岳 文夫

## 【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県秦野市曾屋30番地 東芝セラミックス株式会社 開発研究所内

【氏名】 近藤 浩之

## 【特許出願人】

【識別番号】 000221122

【氏名又は名称】 東芝セラミックス株式会社

## 【代理人】

【識別番号】 100101878

## 【弁理士】

【氏名又は名称】 木下 茂

## 【手数料の表示】

【予納台帳番号】 063692

【納付金額】 21,000円

## 【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9204946

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 可視光活性型光触媒

【特許請求の範囲】

【請求項1】 二酸化チタンに、窒素、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも2種類がドープされていることを特徴とする可視光活性型光触媒。

【請求項2】 二酸化チタンに、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも1種類および窒素がドープされていることを特徴とする可視光活性型光触媒。

【請求項3】 前記光触媒の粒子0.2gを10cm四方に均一層とした試料を容積1lのガスバッグ内に入れ、当初イソプロパノールガス濃度を1500ppm±150ppmとし、前記試料に、紫外線が遮光された蛍光灯光を、波長420nmにおける強度1mW/cm<sup>2</sup>で1時間照射後、生成したアセトンガス濃度が500ppm以上となるものであることを特徴とする請求項1または請求項2記載の可視光活性型光触媒。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、可視光活性型光触媒に関し、より詳細には、可視光の照射に対して活性を示し、このような光触媒活性を利用して、分解、除去、消臭、抗菌、防汚、防曇等の作用を奏することにより、塗料、繊維製品、シックハウス解消剤、工業排水・排ガス等の無害化処理剤等に好適に用いることができる可視光活性型光触媒に関する。

【0002】

【従来の技術】

二酸化チタン等の半導体粒子に、そのバンドギャップ以上のエネルギーを有する光を照射すると、光励起により生成した電子および正孔が、該半導体粒子表面に移動し、周囲に存在するイオン種や分子種に作用して、光触媒反応と呼ばれる様々な反応を引き起こす。

特に、二酸化チタン微粒子は、その表面に生じた正孔が、強力な酸化力を有していることから、塗料、繊維製品、シックハウスの解消、工業排水・排ガスの無

害化処理剤等への応用が種々提案されており、一部は既に実用化されている。

#### 【0003】

従来、光触媒技術分野において使用されている二酸化チタン微粒子は、アナターゼ型またはルチル型の結晶質である。

アナターゼ型またはルチル型の二酸化チタンのバンドギャップは、それぞれ3.2 eV (波長387.5 nmに相当) または3.0 eV (波長413.3 nmに相当) であるため、励起光としては、それぞれ波長387.5 nm以下または波長413.3 nm以下の短波長光、すなわち、紫外線以外の光は利用されていなかった。

#### 【0004】

このため、前記結晶質の二酸化チタンは、光の中に紫外線がほとんど存在しない屋内等で使用される内装塗料、繊維製品、シックハウス解消剤等の用途においては、機能を果たすことは困難であり、实际上、用途範囲は制限されていた。

これに対して、最近では、太陽光および人工光を効率よく利用する目的で、可視光の照射により触媒活性を示す二酸化チタンの開発が種々検討されるようになってきた。

#### 【0005】

例えば、特許文献1には、高減圧下で、水素プラズマ処理、希ガス類元素プラズマ処理をしたり、希ガス類元素のイオン注入、または、真空中での高温加熱等の方法を用いて、アナターゼ型の二酸化チタンの結晶格子構造を酸素欠乏型とし、これにより、可視領域の光照射での触媒活性を発現させた可視光活性型光触媒およびその製法が開示されている。

#### 【0006】

また、二酸化チタンに窒素ドープすることによる可視光応答型の二酸化チタン光触媒もある（非特許文献1参照）。例えば、特許文献2には、結晶内に窒素が存在する特定の二酸化チタン結晶が可視光の照射に対して触媒活性を示すことが開示されている。

窒素ドープされた二酸化チタンは、ドープされた窒素が、格子間の隙間に入った状態、または、格子酸素のサイトに窒素が置換された形で入っている状態の構

造となっている。

このような窒素ドープされた二酸化チタンは、塩化チタン溶液をアンモニア中で加水分解することにより、または、二酸化チタンをアンモニアガス中で加熱することにより合成することができる。

#### 【0007】

上記した酸素欠乏型または窒素ドープされた二酸化チタンにおいては、酸素欠乏欠陥またはTi-Nの結合により、二酸化チタン光触媒に可視光活性がもたらされると考えられる。

#### 【0008】

##### 【特許文献1】

特許第3252136号公報

##### 【特許文献2】

特開2001-190953号公報

##### 【非特許文献1】

“Nikkei Mechanical 2001.10”, n.o. 565, p. 36-45

#### 【0009】

##### 【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、上記した酸素欠乏型または窒素ドープされた二酸化チタンは、可視光による光触媒活性が必ずしも十分に高いとは言えず、また、光触媒活性の安定性に劣る等の課題を有していた。

#### 【0010】

例えば、窒素ドープされた二酸化チタンのTi-N結合に基づくXPS（X線光電子分光法）分析によるピークは、空気中での熱処理により消失するという報告もあることから、上記のような技術的課題が生じる原因としては、空気と接触している粒子表面においては、酸素欠乏欠陥またはTi-N結合が不安定であることによるものと推測される。

#### 【0011】

本発明は、上記技術的課題を解決するためになされたものであり、可視光照射に対して高い光触媒活性を示すとともに、その光触媒活性が、安定性、持続性に

優れている可視光活性型光触媒を提供することを目的とするものである。

### 【0012】

#### 【課題を解決するための手段】

本発明に係る可視光活性型光触媒は、二酸化チタンに、窒素、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも2種類がドープされていることを特徴とする。

このように構成された可視光活性型光触媒は、従来の酸素欠乏型または窒素ドープされた二酸化チタンによる可視光活性型光触媒に比べて、より優れた光触媒活性を示し、しかも、その光触媒活性は、安定性、持続性に優れたものである。

### 【0013】

また、本発明に係る可視光活性型光触媒の他の態様としては、二酸化チタンに、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも1種類および窒素がドープされていることを特徴とする。

このように、窒素を必須のドーパントとして、それ例外に、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも1種類をドープすることにより、より優れた可視光活性を示すことができる。

### 【0014】

前記可視光活性型光触媒は、該光触媒の粒子0.2gを10cm四方に均一層とした試料を容積1lのガスバッグ内に入れ、当初イソプロパノールガス濃度を1500ppm±150ppmとし、前記試料に、紫外線が遮光された蛍光灯光を、波長420nmにおける強度1mW/cm<sup>2</sup>で1時間照射後、生成したアセトンガス濃度が500ppm以上となるものであることが好ましい。

上記のようなイソプロパノール（IPA）酸化反応による光触媒活性評価法によって、本発明に係る可視光活性型光触媒が、可視光照射に対して優れた光触媒活性を示すものであることの明確化を図ることができる。

したがって、本発明に係る可視光活性型光触媒は、上記のようなIPA酸化活性を示すことにより、可視光照射下において、シックハウスの原因と言われているホルムアルデヒド等のアルデヒド類ガス、車の排ガスNO<sub>x</sub>等の環境汚染物質、ダイオキシン等の環境ホルモン等の人体を害する物質を分解・除去する等の優れた機能を発揮することができる。

### 【0015】

#### 【発明の実施の形態】

以下、本発明をより詳細に説明する。

本発明に係る可視光活性型光触媒は、二酸化チタンに、窒素、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも2種類がドープされているものである。

このような2種類以上の元素がドープされた二酸化チタンは、従来の酸素欠乏型または窒素ドープされた二酸化チタンとは異なる構成を有しており、このような従来の可視光活性型光触媒に比べて、より優れた光触媒活性を示すものである。しかも、その光触媒活性の安定性、持続性に優れており、空気と接触した場合であっても容易に失活することはない。

なお、紫外線照射に対する光触媒活性も、従来の二酸化チタン光触媒と同程度以上の性能を示す。

### 【0016】

また、前記可視光活性型光触媒においては、窒素を必須のドーパントとして、それ例外に、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも1種類をドープすることにより、より優れた可視光活性を示すことができる。

### 【0017】

前記粒子における二酸化チタン成分の含有量は、80重量%以上であることが好ましく、より好ましくは、95重量%以上である。

二酸化チタン成分の含有量が80%未満である場合は、十分な光触媒活性が得られない。

したがって、20重量%未満の範囲であれば、二酸化チタンの可視光照射による光触媒活性を損なわない限り、他の無機化合物等を混合した複合粒子を用いることができる。

二酸化チタンに混合される無機化合物としては、例えば、シリカ、アルミナ、ジルコニア、マグネシア、酸化亜鉛等を挙げることができる。

### 【0018】

前記二酸化チタンには、ルチル型（正方晶系）、アナターゼ型（正方晶系）、ブルッカイト型（斜方晶系）の3種の変態があり、いずれもチタン原子に酸素原

子が6配位した、ゆがんだ八面体の稜が共有された構造を有している。本発明においては、このうち、光触媒活性を発現させる観点から、ルチル型またはアナターゼ型のものを用いることが好ましく、特に、アナターゼ型が好ましい。

### 【0019】

本発明においては、この二酸化チタンを主成分とする粒子に、窒素、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも2種類の元素をドープすることにより、可視光活性型光触媒を得る。前記ドーパントのうち、窒素は必須ドーパントとすることが、より好ましい。

ドーパント濃度は、各元素について、0.01原子%以上であることが好ましく、より好ましくは、0.03原子%以上5.00原子%以下である。

前記各ドーパント濃度が0.01原子%未満である場合は、可視光照射に対する十分な光触媒活性が得られず、特に、初期活性の立ち上がりが遅く、しかも、立ち上がり勾配が小さく、可視光の強度や用途等によっては、その目的を十分に達成することが困難な場合がある。

### 【0020】

上記各ドーパントのドーピング方法は、特に限定されるものではなく、通常、この種のドープにおいて用いられる、熱拡散法、レーザドーピング法、プラズマドーピング法、イオン注入法等の方法を採用して差し支えない。

具体的には、イオン注入装置を用いて、窒素アニオンや炭素アニオン源等からの加速イオンを二酸化チタンターゲットに打ち込む方法により行うことができる。

また、窒素および炭素ドープの場合には、シアン（H<sub>2</sub>CN）、シアン酸もしくはイソシアン酸（HOCN）、低級アミン（RNH<sub>2</sub>、R<sub>2</sub>NH、R<sub>3</sub>N）、アゾ、ジアゾ化合物等を含有する溶液、または、これらとアンモニア（NH<sub>3</sub>）とを含有する溶液中で、塩化チタン（TiCl<sub>4</sub>）等の溶液状ハロゲン化チタンを加水分解する方法を用いることもできる。あるいはまた、シアン、シアン酸またはイソシアン酸、低級アミン等またはこれらとアンモニアとを含有するアルゴン等の不活性ガス気流中で、または、メタン、プロパン等の炭化水素とアンモニアとの混合ガス気流中で、二酸化チタンを熱処理（アニール）する方法等によっても

行うことができる。

#### 【0021】

なお、前記ドーパントは、それぞれ別の化合物の分解によってドープしてもよい。このとき、各ドーパントのドーピングは、同時でも、逐次でもよく、また、ドープ時期についても、その態様に応じて、粒子形成時または形成後のいずれであってもよい。

#### 【0022】

前記二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は、化学量論的には、1個のチタン原子に結合している酸素原子数は2個である。

本発明においては、このような化学量論的な化学組成からなる二酸化チタンに、前記ドーパントをドープすることにより、1個のチタン原子に結合している酸素原子数が、化学量論的な数である2個よりもずれた、すなわち、非化学量論的な数を有するような構造とすることが好ましい。

二酸化チタンがこのような構造をとることにより、可視光照射に対する高い光触媒活性を発揮することができるものと考えられる。

具体的には、1個のチタン原子に対して結合している酸素原子数は、1. 90以上2. 00以下となることが好ましい。

#### 【0023】

前記可視光活性型光触媒粒子の粒径は、十分な光触媒活性および溶媒への分散性等の観点から、 $1\ \mu m$ 以下であることが好ましく、より好ましくは、 $0.01\ \mu m$ 以上 $1\ \mu m$ 以下である。

このような粒径範囲にある二酸化チタン光触媒粒子は、微粒子であるため、塗料用途等にも、好適に用いることができる。

#### 【0024】

本発明に係る可視光活性型光触媒は、可視光の照射下において、イソプロパノール (IPA) 酸化活性を示すものである。

特に、該光触媒の粒子 $0.2\ g$ を $10\ cm$ 四方に均一層とした試料を容積 $1\ l$ のガスバッグ内に入れ、当初イソプロパノールガス濃度を $1500\ ppm \pm 150\ ppm$ とし、前記試料に、紫外線が遮光された蛍光灯光を、波長 $420\ nm$ に

おける強度  $1 \text{ mW}/\text{cm}^2$  で 1 時間照射後、生成したアセトンガス濃度が 500 ppm 以上となるものであることが好ましい。

IPA は酸化されると、アセトンを生成する。さらに、酸化反応が進行すると、最終的には、二酸化炭素と水を生成する。このような IPA の酸化反応は、光触媒活性を評価するための標準的な方法の一つとして用いられている。

### 【0025】

一般に、二酸化チタン等の光触媒活性の評価方法としては、光触媒製品技術協議会の光触媒性能評価試験法 II b (ガスバッグ B 法) が用いられるが、このガスバッグ B 法は、紫外線照射による光触媒活性を評価するものである。

これに対して、本発明においては、可視光照射に対する光触媒活性を評価するために、上記のような独自の評価試験法を採用する。これにより、本発明に係る可視光活性型光触媒が、可視光照射に対して優れた光触媒活性を示すものであることの明確化を図ることができる。

### 【0026】

以下、本発明に係る可視光活性型光触媒の上記光触媒活性の評価試験法の具体例を説明する。

まず、光触媒粒子 0.2 g をエタノールに分散させて、これを  $10 \text{ cm} \times 10 \text{ cm}$  の塩化ビニル板に塗布し、これを試験試料とする。

次に、この試験試料を、容積 1 l のテドラーーバッグに入れた後、イソプロパノール (IPA) 蒸気を含んだ空気を該テドラーーバッグ内に 1 時間循環させ、光触媒粒子のガス吸着を飽和させる。

このテドラーーバッグ内の IPA ガス濃度およびアセトンガス濃度をガスクロマトグラフィにより測定し、IPA ガス濃度が  $1500 \text{ ppm} \pm 150 \text{ ppm}$ 、アセトンガス濃度が 0 ppm となるように試験ガスを調製し、この状態を可視光照射前 (当初) の状態とする。

そして、前記テドラーーバッグを、波長  $410 \text{ nm}$  以下の紫外線をカットするフィルムを装着させた蛍光灯を用いて、波長  $420 \text{ nm}$  における光強度  $1 \text{ mW}/\text{cm}^2$  の光を 1 時間照射後、IPA ガス濃度および IPA の酸化により生成したアセトンガス濃度を測定する。

本発明に係る可視光活性型光触媒は、このときのアセトンガス濃度が500 ppm以上となるものであることが好ましく、これにより、優れた可視光活性を示す光触媒であることを明示することができる。

### 【0027】

上記のような可視光の照射下におけるIPAの酸化反応の促進作用、すなわち、IPA酸化活性を示すことは、シックハウスの原因と言われているホルムアルデヒド等のアルデヒド類ガス、車の排ガスNO<sub>x</sub>等の環境汚染物質、ダイオキシン等の環境ホルモン等の人体を害する物質を分解・除去する能力を持つことを意味し、可視光活性型光触媒としての優れた機能が発揮されると言える。

### 【0028】

#### 【実施例】

以下、本発明を実施例に基づきさらに具体的に説明するが、本発明は下記の実施例により制限されるものではない。

#### 【実施例】

窒素0.25原子%および炭素0.05原子%をドープした二酸化チタン微粒子（一次粒径約20～30nm）を合成し、光触媒を作製した。

この光触媒について、可視光に対する光触媒活性を評価した。

### 【0029】

この可視光活性評価試験は、下記の方法により行った。

まず、上記により合成した光触媒粒子0.2gをエタノールに分散させて、これを10cm×10cmの塩化ビニル板に塗布し、これを試験試料とした。

次に、この試験試料を、容積1lのテトラーバッグに入れた後、イソプロパノール（IPA）蒸気を含んだ空気をテトラーバッグ内に1時間循環させ、光触媒粒子のガス吸着を飽和させて、試験ガスを調製した。

この試験ガスのIPAおよびアセトンのガス濃度をガスクロマトグラフィ（Shimadzu GC-8A、カラム：島津パックドカラムSBS-100）により測定したところ、IPAは1600ppm、アセトンは未検出（ND）であった。この状態を可視光照射前（当初）の状態とした。

そして、前記テトラーバッグを、波長410nm以下の紫外線を遮光するフィ

ルム（富士写真フィルム株式会社製 UV Guard UGP20WL10）を装着させた蛍光灯（Toshiba F L R 2 0 S, W/M）を用いて、波長420nmにおける光強度1mW/cm<sup>2</sup>の光を1時間照射後、IPAガス濃度およびIPAの酸化により生成したアセトンガス濃度を測定した。

この結果を表1に示す。

### 【0030】

#### 【比較例】

市販の酸素欠乏型二酸化チタン微粒子（エコデバイス株式会社製；E-03）について、上記実施例と同様にして、可視光に対する光触媒活性を評価した。

この結果を表1に示す。

### 【0031】

#### 【表1】

照射時間		当初	1hr
実施例	IPA(ppm)	1600	1180
	アセトン(ppm)	ND	800
比較例	IPA(ppm)	1600	1380
	アセトン(ppm)	ND	250

### 【0032】

表1に示した評価結果から、窒素および炭素の2種類をドープした二酸化チタン光触媒粒子（実施例）は、可視光の照射によって、IPAの酸化反応により生成したアセトンガスが検出され、可視光に対する光触媒活性を示すことが認められた。

また、この本発明に係る光触媒は、可視光照射1時間後に検出された生成アセトンガスの量から、酸素欠乏欠陥型の市販品（比較例）よりも、3倍以上の優れた光触媒活性を示すことが認められた。

なお、光を照射しない暗条件においては、変化は観察されなかった。

### 【0033】

#### 【発明の効果】

以上のとおり、本発明に係る可視光活性型光触媒は、従来の可視光活性型光触媒に比べて、可視光照射に対して高い光触媒活性を示すとともに、その光触媒活

性は、安定性、持続性に優れたものである。

このため、本発明に係る可視光活性型光触媒は、その光触媒活性を利用して、分解、除去、消臭、抗菌、防汚、防曇等の作用を奏することにより、塗料、繊維製品、シックハウス解消剤、工業排水・排ガス等の無害化処理剤等の様々な用途に好適に用いることができる。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 可視光照射に対して従来品よりも高い光触媒活性を示すとともに、その光触媒活性が、安定性、持続性に優れている可視光活性型光触媒を提供する。

【解決手段】 二酸化チタンに、炭素、硫黄、水素から選ばれた少なくとも1種類および窒素がドープされている可視光活性型光触媒であって、該光触媒の粒子0.2gを10cm四方に均一層とした試料を容積1lのガスバッグ内に入れ、当初イソプロパノールガス濃度を1500ppm±150ppmとし、前記試料に、紫外線が遮光された蛍光灯光を、波長420nmにおける強度1mW/cm<sup>2</sup>で1時間照射後、生成したアセトンガス濃度が500ppm以上となるものを得る。

【選択図】 なし

特願2002-271576

出願人履歴情報

識別番号

[000221122]

1. 変更年月日

[変更理由]

住 所  
氏 名

1990年 8月 9日

新規登録

東京都新宿区西新宿1丁目26番2号  
東芝セラミックス株式会社

2. 変更年月日

[変更理由]

住 所  
氏 名

1999年 9月 8日

住所変更

東京都新宿区西新宿七丁目5番25号  
東芝セラミックス株式会社